書 評・紹 介

Victor S. D'Souza, *Economic Development, Social Structure and Population Growth,*

New Delhi : Sage Publication, 1985, 136pp.

人口学，経済学，社会学という三分野の学問的視野から，個人およびグループとコミュニティーにみられる変化を区別して分析すること（14ページ）とは，果たして何を生み出すべきものであろうか．学際的研究の蒙昧に陥るだけであろうか．結果の正否にかかわらず，壮大な課題を意識にもちつつ地道な調査研究から一歩でも現実に近づこうとする著者の姿勢が本書からうかがえる．

本書は，パンジャブ大学社会学部に新設された人口研究センターによって1980年に行なわれた最初の大規模実地調査の報告書である．調査には，パンジャブ州から二村，ハリアナ州から一村，人口規模で4000人から5000人程度の農村を対象とし，三分の一の世帯を無作為抽出している．特に，カーストが経済発展と人口増加との相互関連に与える影響を世代間の階層移動を通じて分析することを中心にモノグラフ的に組み立てられている．全体で8章からなり，次の題目からなる．

第1章　経済発展と人口増加の関連を理解するための視座
第2章　調査村の社会経済的インフラストラクチャー
第3章　社会経済的背景と生活条件
第4章　調査村にみられる人口増加率の格差との関連要因
第5章　三村における経済変化，移動性，社会構造
第6章　経済変化，社会構造，家族規模
第7章　社会移動性，家族計画，家族規模
第8章　要約と検討

本調査から得られる主な結果は第8章にまとめられている．社会構造としてとらえられている唯一の要素はカーストである．経済発展の成果の分配がカースト間で異なることが世代間の階層（職業の社会的地位）の上昇・下降により観察されている．人口あるいは労働力の流動性がカーストの存在により自由競争的には働かず，農村においては商業的カーストや宗教的カーストが経済発展のもとで最も有利なグループであった．土地保有農民については，家族規模が世代間の土地保有面積の増減に関わっていることがしめされている．農業労働者の大部分は下層カーストからなっている．従って，家族規模の大小はカーストという制度的な外部性の枠内で経済発展と世代間の階層移動に左右されていることが示される．

著者は経済学および人口学の理論的アプローチに批判的であるが，これはカーストが経済発展や人口転換に与える影響が無視できないことに基づくものであるように思われる．残念ながら，著者の経済学理論の理解には不十分な点がみられ，批判の論点は偏っている．しかし，制度的な枠組みが存在するなかで，世代間の階層移動の分析を通じてミクロ・マクロ的経済条件と家族規模の変化を関連づける作業は，経済学においても十分になされているとはいえない．理論に先行して現実の問題を指摘している点で著者の意図がかなり反映されているが，理論分析と政策提言は今後の課題として著者のみでなく読者にも残されている．　（松下敬一郎）